

美術の窓(145)

フリーア美術館と所蔵品のウェブ公開

大和文華館館長 浅野秀剛

4月中旬、北斎の肉筆画の取材・撮影のため、アメリカ、ワシントンDCのフリーア美術館に一週間ほど出張した。ワシントンは7回目であるが、最後は2006年5月だったので、12年ぶりの訪問である。過去6回のうち半分の3回は、フリーア美術館の北斎の肉筆画がらみであり、今回もそうであった。フリーア美術館には100を超す北斎の肉筆画が所蔵されている。間違いなく世界最大で、所蔵品だけで北斎の肉筆画展ができるのはフリーアだけということになる。フリーアのコレクションは、寄贈したチャールズ・ラング・フリーアの遺言で、貸し出しが禁じられているので、フリーア美術館に行かないと見るができない。したがって、昨年、大英博物館とあべのハルカス美術館で開催した北斎展にも1点も出品されていない。

フリーア美術館と地下で繋がっているサックラー・ギャラリー（現在、フリーアとサックラーは同一組織）では、昨年の春、画期的な「歌麿展」があった。いずれも幅が2～3メートルもある歌麿の肉筆画の大作、雪月花三部作が揃って展示されたのである。現在、三部作のうち、最初に制作された「品川の月」はフリーア美術館に、二番目に制作された「吉原の花」はハートフォード（アメリカ）のワズワース・アセーニウム（美術館）に、最後に制作された「深川の雪」は箱根の岡田美術館に所蔵されている。その3点は、明治初めまで栃木にあったもので、明治12年（1879）に栃木で揃って展示された後、流出。以来、揃うことは一度もなかった。それが138年ぶりに並んで展示されたのである。フリーア美術館のものは外に持ち出すことができないので、3点一緒に展示できるとすればフリーアでし

か実現できないのである。惜しいことに、私は北斎展の準備もあって、その壮観を味わうことはできなかった。だから、別々に見た三部作を頭の中で組み立ててそれを想像し、自らを慰めている。

フリーア美術館といえど、北斎・歌麿のほかにも、もう一つ忘れられない思いがある。数年前に、ドイツのコレクター、ゲルハルト・ブルヴェラー先生の本のコレクションが収蔵されたことである。私は、30年前、ドイツ・ケルンのご自宅に先生を訪ねて以来、先生のコレクションから多大な恩恵を受けてきた。そのコレクションのうち、日本の近世・近代の絵本・絵入本が一括してフリーア美術館の所蔵となった。その数は1000点に近い。そしてそれが今、すべてウェブサイトで開催されているのである。

本であるから少ないものでも10頁、多いものでは100頁を超える。表紙・裏表紙を含め、その全頁が精度の高いデータで公開されている。図版数は数万に及び、加えて丁寧な書誌も付いている。それが研究者に与える恩恵は計り知れない。筆で描いた写本ではなく、木版による版本で、かつ大きさもしているもので、現物を見なくても、研究はほとんどそのウェブで事足りる。ワシントンに行かなくても、担当者の手を煩わさなくても、本を傷めなくても、パソコンさえあれば、いつでもどこでも見ることができるのである。フリーア美術館では、他のコレクションのウェブ公開も進み、少なくとも私が研究対象とする作品のほとんどはウェブで見ることができる。

フリーア美術館は特に充実しているのがアメリカでは、日本に比べ、はるかに所蔵品のウェブ公開が進ん

でいる。主要な美術館ばかりでなく、中小の美術館や大学美術館の公開もかなり進んでいる。アメリカほどではないが、ヨーロッパも、所蔵品のウェブ公開には積極的である。

翻って、日本はどうであろうか。博物館・美術館全体の現状を論じる力はないので、私が専門とする浮世絵・絵入版本に限定して述べると、所蔵する浮世絵をほとんどすべて（研究に利用できるボリュームで）ウェブ公開している博物館・美術館は、江戸東京博物館・国立歴史民俗博物館・早稲田大学演劇博物館・石川県立美術館・山口県立萩美術館浦上記念館、それに国会図書館・東京都立中央図書館・静岡県立中央図書館・国立劇場・立命館大学アトリサーチセンター・国際日本文化研究センター・慶應義塾大学メディアセンターとなる。中で最も充実しているのは、早稲田大学演劇博物館・国会図書館・東京都立中央図書館・静岡県立中央図書館・国立劇場・立命館大学アトリサーチセンター・慶應義塾大学メディアセンターであろう。そのなかに、日本で最も充実したコレクションを有する東京国立博物館が入っていないのはいかにも寂しい。

大和文華館も加入している全国美術館会議のなかの情報・資料研究部会では、『全国美術館会議会員館 収蔵品目録総覧 2014』（全目録総覧 2014）を作成し、ウェブで公開しているが、それを見ると、所蔵品を冊子形態で網羅的に掲載発行している美術館は少なくないことが分かる。かく言う大和文華館もその一つである。大和文華館では、今、所蔵品図版目録のカラー化を進めている。その先にあるの

はもちろんウェブ公開である。作品を所有する世界のすべての機関が全コレクションをウェブで公開するようになると、研究環境のみならず、作品鑑賞の環境とその方法が180度変わることになるであろう。

フリーア美術館での仕事はハードであったが、土日は美術館の都合で休日となった。そうしたら、ロンドンから参加した大英博物館のクラーク氏から、土曜日に花見をしないかと誘われた。ワシントンは桜祭りのシーズンだったのである。ワシントンの桜は百年以上の歴史があり、日本の花見に劣らない賑わいを見せる。私たちは、地下鉄のウォーターフロントで待ち合わせをし、ボトマック川沿いに西に歩いた。凄い人である。川辺の魚市場をひとわり見学した後、蒸したロブスターを2匹買い、橋を渡って中島に行き、一本の枝垂れ桜の下に腰を下ろした。その桜の下には他に誰もいない。〈草上の昼食〉のメニューは、白ワインにフランスパン、ロブスターにサラダ、それに西瓜である。良く晴れ、川面を行き交う船を眺めながらの昼食は、言葉に尽しがたい。

そして、いい思い出とともに帰途についた。

季刊 美のたより No.203

平成30年 7月 6日

発行 大和文華館